

BOOK REVIEW

『街道をゆく 29 秋田県散歩他―新装版―』司馬遼太郎(2009年)、朝日新聞出版。

『街道をゆく』は1971年から1996年まで「週刊朝日」に連載された紀行文集である。日本国内のみならず、モンゴルやニューヨークなど海外の紀行文を含め文庫本では、43冊に収録している。司馬氏は1986年6月26日から28日まで、秋田県内を取材し、「秋田県散歩」を執筆した。

象潟、秋田市土崎・金足・浜田、寒風山、能代、大館、鹿角を訪れ、西行、松尾芭蕉、菅江真澄(紀行家)、栗田定之丞(佐竹家砂留役)、越後屋太郎右衛門(能代の町人)、狩野亨吉(哲学者)、内藤湖南(歴史家)の足跡を辿ることで、彼らの人物像を通して、秋田県の風土や歴史文化、さらには、産業や県民性までを浮き彫りにしていく。

西行の歌「象潟や桜の波にうづもれて花の上こぐあまの釣舟」に芭蕉の句「象潟や雨に西施が合歡の花」を重ねて、「象潟はもはや陸地になっているといえ、この一句によって不滅になった。西行は象潟を絵画にし、芭蕉は音楽にしたともいえる」と論ずるくだりは圧巻である。目先の社会現象に囚われずに、地元秋田を見つめ直せる良書である。



蘇る古(いにしえ)の絶景、水田に浮かぶ鳥海山と九十九島